

徳川齊昭が鍛えた刀

— 葵くずし —



短刀「葵くずし」



「葵くずし」紋の拡大

土浦土屋家が所蔵していた刀剣の中に、水戸徳川家9代藩主齊昭(烈公)が自ら鍛えた刀があります。齊昭は水戸徳川家7代治紀の三男で、文政12(1829)年に長兄の齊脩(8代)の後を継いで藩主となっています。齊昭は積極的な藩政改革を推し進める中で、軍備の充実を図り、その一つに鍛刀の奨励がうかがえます。齊昭が藩主在任中に活躍した水戸藩の刀匠は、市毛徳鄰や直江助政・助共父子、勝村徳勝などが著名で、彼らを補佐として齊昭自ら刀を作ったとされています。

齊昭が作刀を始めたのは、水戸の領地に最初に帰った天保4(1833)年ごろからと考えられています。齊昭がどの程度まで自ら作刀したかは分かりませんが、助政は天保5年に、徳鄰は天保6年に没しており、藩政改革の多忙な齊昭が作刀に専念するには年数が少なすぎます。まして、刀剣を作るには何十年もの修行が必要なことを考えると少し無理があります。おそらく齊昭が作刀に興味を抱いたのは、もっと若い頃からだと考えられます。

齊昭が作った刀には、徳川家の家紋である葵紋を圖案化したものを茎(刀身の手握る部分)に彫っていることから、水戸では昔から「葵くずし」と呼んでいます。身分のある者が作った刀を「慰打ち」などと呼び、その最初で最も有名なのが後鳥羽上皇です。後鳥羽上皇は、院政を行って広大な皇室領を手中におさめ、鎌倉幕府に対する朝廷の勢力挽回策を図っています。その一つに、国内の名工を招集して自ら刀を焼き入れ、公卿や殿上人、北面や西面の武士(院中を警護した武士)に与えて、上皇方の士

気を大いに鼓舞したとされています。後鳥羽上皇の作刀は、茎に16花弁の菊を彫り「菊御作」と呼ばれています。

齊昭の作刀である「葵くずし」をよく見ると、菊紋に似せた16花弁の中心を3本の線で結び、葵紋風にしたものを彫っていることが分かります。おそらく、後鳥羽上皇の「慰打ち」に倣って作刀したものと考えられますが、菊紋と葵紋を合わせたような圖案は何を意味するのでしょうか。

強硬な攘夷論者であった齊昭は、弘化元(1844)年に幕命により隠居、謹慎処分を受けています。また、嘉永6(1853)年のペリー来航後は、海防問題の幕政参与に任ぜられましたが、開国派と対立して安政4(1857)年には辞任しています。その後、幕政との対立がますます深まり、尊攘派への弾圧事件(安政の大獄)や水戸浪士による大老井伊直弼の暗殺(桜田門外の変)へと続き、万延元(1860)年8月に亡くなっています。

このような中でも、齊昭は多くの子女に恵まれ、22男、15女をもうけています。その内男児を養子に出した家が10家、女兒を嫁がせた家が7家あり、それぞれの大名家に「葵くずし」の刀を贈っています。土屋家の11代藩主挙直は齊昭の17男で、土屋家にも「葵くずし」の刀が4口伝わっています。多くの大名家と縁戚関係を結び、自ら作刀した刀を贈ることは、齊昭にとっての勢力挽回策の一つだったのかもしれない。

土屋家伝来の「葵くずし」の刀剣4口は、9月19日(土)から10月11日(日)までテーマ展「烈公打ちの刀―水戸刀工と金工の名品―」で公開しています。

岡市立博物館(☎824・2928)